

## 資料

### 一、「議会の多数を得ての革命」の路線について

#### ○マルクス、エンゲルスの普通選挙権論

【一—1】エンゲルス「共産主義の諸原理」（一八四七年）

「第一八問 この革命は、どのような発展の道をとるのであるのか？

答——それは、なによりもまず、民主主義的国家体制を、そしてそれとともに、直接または間接に、プロレタリアートの政治的支配を樹立するのである。プロレタリアがすでに人民の多数をなしているイギリスでは直接に、人民の多数がプロレタリアだけではなく、小農民および小市民からも成り立っており、この小農民および小市民は、まさにようやくプロレタリアートへと移行しつつあって、彼らのすべての政治的利益がますますプロレタリアートに依存するようになり、したがって間もなくプロレタリアートの諸要求に結びつかねばならなくなるフランスおよびドイツでは間接に、である。これには、おそらく第二の闘争を要するであろうが、それはしかし、プロレタリアートの勝利をもつてのみ終わるのである。」（古典選書『共産党宣言／共産主義の諸原理』新日本出版社、一三一—ページ）

【一—2】マルクス「チャーティスト」（「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」一八五二年八月二五日付）

「普通選挙権は、イギリスの労働者階級にとっては政治的権力と同意義のものである。というのは、イギリスではプロレタリアートが人口の大多数を占め、公然とはやられなかったにせよ長い内乱のなかで、階級としての自己の立場の明確な意識を得ており、農村地帯にさえもう農民はみられず、ただ地主と産業的な資本家（借地農業者）と雇用労働者とがみられるだけだからである。したがって、イギリスにおける普通選挙権の実施は、大陸で社会主義的方策の名で尊ばれてきているどんなものよりも、はるかに社会主義的な一方策となるであろう。」

この場合、このことの不可避の結果は、労働者階級の政治的制覇である。」（『マルクス・エンゲルス全集』第八卷、三三六ページ）

【一—3】マルクス「行政改革協会——「憲章」」（「新オーダー新聞」一八五五年六月八日付）

「フランスの社会は三分の二が農民から、三分の一強が都市住民からなりたっているのに、イギリスでは三分の二が都市に住み、三分の一以下が農村に住んでいる……。したがってイギリスでは、普通選挙権の結果は、そのフランスにおける結果と逆の関係にならざるをえない……。イギリスでは、普通選挙権は、一方に貴族およびブルジョアジーと、他方に人民諸階級とのあいだの広大な仕切り線をなしている。……それは人民諸階級の憲章であり、彼らの社会的要求を実現するための手段としての政治権力の獲得を意味してい

る。……

チャーティストは議会の全能を人民の権力にまで向上させることによって議会の全能の高め拡大しようと欲している。彼らは議会制度を破壊せず、それをいっそう高度の水準に高めようとする。」（『全集』第一巻、二六六〜二六七ページ）

### ○社会発展の平和的な道と“ 奴隷所有者の反乱 ”

※ 「奴隷所有者の反乱」とは、アメリカの南北戦争（一八六一〜六五年）が、奴隷制拡大を求める南部諸州が武力に訴えたことから始まったことを指す。

【一—4】マルクス「『ザ・ワールド』紙通信員とのインタビュー」（一八七一年）

「ランダー この国「イギリス」では、期待される解決は、それがなんであれ、革命的強力的手段なしに実現されるように思われます。少数派が多数派にかわるまで演壇と新聞とで扇動するというイギリスの制度は、希望に満ちた制度です。

マルクス 私はその点についてはあなたほど楽観的ではありません。イギリスの中間階級「ブルジョアジーのこと」は、投票権の独占を享受していたかぎりには、いつでも多数派の判定をよるこんで受けいれることを示してきました。しかし、いいですか、この階級は、それが決定的問題と考えていることで投票に敗れるやいなや、ここでわれわれは新たな奴隷所有者の戦争を経験するでしょう」（『全集』第一七巻、六一三ページ）

【一—5】マルクス「「国際労働者協会」ハーグ大会についての演説」（一八七二年）

「労働者は、新しい労働の組織をうちたてるために、やがては政治権力をにぎらなければならぬ。……

しかし、われわれは、この目標に到達するための手段はどこでも同一だと主張したことはない。

われわれは、それぞれの国の制度や風習や伝統を考慮しなければならないことを知っており、アメリカやイギリスのように、そしてもし私がある方々の国「オランダ」の制度をもっとよく知っていたならば、おそらくオランダをもそれにつけかわえるであろうが、労働者が平和的な手段によってその目標に到達できる国々があることを、われわれは否定しない。だが、これが正しいとしても、この大陸の大多数の国々では、強力がわれわれの革命のテコとならざるをえないことをも、認めなければならぬ。労働の支配を打ち立てるためには、一時的に強力に訴えるほかはないのである。」（『全集』第一八巻、一五八ページ）

【一—6】マルクス「「社会主義者取締法にかんする帝国議会討論の概要」（一八七八年）

「当面の目標は労働者階級の解放であり、そのことに内包される社会変革（変化）である。時の権力者の側からのいかなる強力的妨害も立ちはだからないかぎりにおいて、ある歴史的発展は『平和的』でありつづける。たとえば、イギリスや合衆国において、労働者が国会「パースラメント」ないし議会「コングレス」で多数を占めれば、彼らは合法的な道で、その発展の障害になっっている法律や制度を排除できるかも知れない。しかも社会的

発展がそのことを必要とするかぎりだけでなく、旧態に利害関係をもつ者たちの反抗があれば、『平和的な運動は『強力的な』ものに転換するかも知れない。その時は彼らは（アメリカの内乱「南北戦争」やフランス革命のように）強力によって打倒される、『合法的』強力にたいする反逆として。」（『全集』第三四巻、四一二ページ）

【一—七】エンゲルス『資本論』第一巻英語版への編集者の序言（一八八六年）

「その人（マルクス）の全理論は、イギリスの経済史と経済状態とにかんする終生の研究の成果であり、またその人はこの研究によって、少なくともヨーロッパでは、イギリスこそ、不可避的な社会革命が平和的で合法的な手段によって完全に遂行される唯一の国である、という結論に達したのである。この平和的で合法的な革命にたいして、イギリスの支配階級が『奴隷制擁護の反乱』なしに屈服するとはほとんど期待していない、と彼がつけ加えることを決して忘れなかったことは言うまでもない」（『資本論』新日本新書版①四四〇四五ページ、上製版I a四四〇四五ページ）

## ○レーニン『国家と革命』の批判的総括

【一—八】レーニンの「強力革命必然」論

「もし国家が階級対立の非和解性の産物であり、もしそれが、社会のうえにたち、『社会にたいして、みずからをますます疎外してゆく』〔\*〕権力であるならば、明らかに被抑圧階級の解放は強力革命なしには不可能であるだけでなく、さらに支配階級によってつくられ、この『疎外』が体现されている国家権力装置の廃絶なしには不可能である……。」（レーニン『国家と革命』新日本文庫、一八ページ）

「ブルジョア国家がプロレタリア国家（プロレタリアートの執権）にとつてかわられるのは、『死滅』の方法によってではありえず、通例では、強力革命によってのみ、ありうることである。」（ブルジョア国家のプロレタリア国家によるおきかえは、強力革命なしには不可能である。」（同前、三四、三五ページ）

\*エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』からの引用。

【一—九】マルクス『フランスにおける内乱』（一八七一年）

「労働者階級は、できあいの国家機構をそのまま掌握して、自分自身の目的のために行使用することはできない。」（『全集』第一七巻、三一二ページ）

【一—一〇】エンゲルスからヴァン・パッテンへの手紙（一八八三年四月一日付）

「マルクスと私は、一八四五年以来、将来のプロレタリア革命の最終結果のひとつは、国家という名のついた政治組織の漸次的な解消と究極的な消滅であるうという見解をもちつづけてきました。……だが同時に、われわれは次のような見解もつねにもちつづけてきました。すなわち、この目的を接待するためにも、また未来の社会革命のそれ以外のはるかに重要な目的を達成するためにも、プロレタリア階級は、まずもって国家という組織された政治権力を手に入れ、その助けをかりて資本家階級の抵抗を粉碎し、社会を新しく組織しなければならぬ、と。このことはすでに、一八四七年の『共産党宣言』の第二章末

尾に書いてあります。

無政府主義者は物事を逆立ちさせています。彼らは、プロレタリア革命は国家という政治組織を廃止することから始めなければならない、と言います。だが、プロレタリアートの勝利ののちに、勝利した労働者階級がすぐ使える形で見いだす唯一の組織が、まさに国家なのです。この国家はその新たな機能を果たすためには、改造を必要とするでしょう。だが、このような時点でそれを破壊することは、勝利した労働者階級が、その助けをかりて、新しく奪取したその権力を有効にはたらかせ、資本家というその敵を制圧し、社会の経済革命を遂行することができない唯一の機構を破壊することになるでしょう。この社会の経済革命がおこなわれなければ、勝利全体が敗北と、パリ・コミューン後のそれと同じような労働者階級の大量虐殺とに終わらざるをえないのです。」（『全集』第三六卷、九〇〜一〇ページ）

【一―11】 エンゲルスからベルンシュタインへの手紙（一八八四年一月一日付）

「『共産党』宣言』の序文のなかに『フランスにおける内乱』から引用している箇所の中で、前にあなたから出されていた質問についていえば、原書（『内乱』一九ページ以下）『全集』第一七卷、三二二ページ以下）にあたえられている回答を読めば、たぶん、あなたも納得したと言うでしょう。……そこで問題になっているのは、たんに次の点を示すことです。すなわち、勝利したプロレタリアートは、旧来の官僚的、行政的・中央集権的な国家権力をまづもってつくりかえてからでなければ、それを自分の目的のために利用することはできない、ということです。これにたいして、一八四八年以来のすべてのブルジョア共和派は、在野の立場にあつたあいだはこの機構をさんざんこきおろしておきながら、いったん自分たちが政府の座につくという時、たちまちなんの変更もくわえずにその機構を引きついで、一部は反動派に対抗して、だがそれ以上にプロレタリアートに対抗して、それを利用してきたのです。」（『全集』第三六卷、七〇〜七一ページ）

### ○エンゲルスの民主共和制論

【一―12】 エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』（一八八四年）

「最高の国家形態である民主共和制——これは、わが現代の社会関係のもとではますます避けがたい必然となりつつあり、プロレタリアートとブルジョアジーとのあいだの最後の決戦はこのなかでのみたたかわれうる……」（古典選書『家族・私有財産・国家の起源』新日本出版社、二二三〜二二四ページ）

【一―13】 エンゲルス「一八九一年の社会民主党綱領草案の批判」（一八九一年六月執筆、いわゆる「エルフルト綱領批判」）

「もし、なにか確かなことがあるとすれば、それは、わが党と労働者階級とが支配権をにぎることができるのは、民主的共和制の形態のもとにおいてだけだ、ということである。この民主的共和制は、すでに偉大なフランス革命が示したように、プロレタリアートの執権のための特有な形態ですらある」（『全集』第二二卷、二四一〜二四二ページ）

【一—14】エンゲルス「尊敬するジョヴァンニ・ボーヴォイへの回答」（一八九二年）

「マルクスと私とは、四十年前前から、われわれにとって民主共和制は、労働者階級と資本家階級との闘争が、まず一般化し、ついでプロレタリアートの決定的な勝利によって、その終末に到達することのできる唯一の政治形態であるということを、あきあきするほど繰り返かえしてきているのである」（『全集』第二二卷、二八七ページ）

【一—15】エンゲルスからポール・ラファルグへの手紙（一八九四年三月六日付）

「プロレタリアートにとっては、共和制が君主制とちがうのは、それが、プロレタリアートの将来の支配にとつてすつかりできあがった政治形態であるという点だけです。諸君「フランス人」は、すでにそれをもっているという点でわれわれ「ドイツ人」よりも有利です。……だが、共和制も、他のすべての統治形態と同じように、その内容によって規定されます。ブルジョア的な支配形態であるかぎり、それは、どのような王政ともまったく同じようにわれわれにたいしてまったく敵対的です（この敵対の諸形態は別にして）。それ故、それを本質的に社会主義的な形態であると見なすこと、ブルジョアジーによって支配されているかぎり、それに社会主義的使命を託することは、まったくいわれない幻想です。」（『全集』第三九卷、一九五ページ）

○マルクス、エンゲルスは革命の二つの形態を厳しく区別していた

【一—16】エンゲルス「エルフルト綱領批判」

「人民の代議機関が全権力をその手に集中していて、人民の多数者の支持を獲得しさえすれば憲法上はなんでも思うようにやれる国でならば、古い社会が平和的に新しい社会に成長移行してゆける場合も、考えられる。つまり、フランスやアメリカのような民主的共和国や、王朝を金で買いとることが目前の問題として日々に新聞紙上で論じられていて、この王朝が人民の意思にたいして無力であるイギリスのような君主国でならば、そういうことも考えられる。だが、ドイツで、政府がほとんど全能で、帝国議会や、その他のすべての代議機関が実権をもたないこのドイツで、しかも必要もないのに公言するということ、絶対主義からイチジクの葉を取りさつて、自分をその裸身の前にくりつけるというものである」

○マルクス「フランス労働党の綱領前文」

【一—17】マルクス「フランス労働党の綱領前文」（一八八〇年）

「生産階級の解放は、性や人種の差別なしに、すべての人間解放であること、生産者は生産手段を所有する場合にはじめて、自由でありうること、生産手段が生産者に所属することのできる形態は、次の二つしかないこと、  
一、個人的形態——この形態は普遍的な現象であったことは一度もなく、また工業の進歩によってますます排除されつつある、

二、集团的形態——この形態の物質的および知的な諸要素は、資本主義社会そのものの発展によってつくり出されてゆく、

以上のことを考慮し、また

このような集団的取得は、独立の政党に組織された生産階級——すなわちプロレタリアート——の革命的行動からのみ、もっぱら生まれうること、

このような組織の達成をめざして、普通選挙権をもふくめて、プロレタリアートの自由になるあらゆる手段で努力しなければならぬこと、このことによつて、普通選挙権は、これまでのような欺瞞の用具ではなくなつて、解放の用具に転化すること、

以上のことを考慮して、

フランスの社会主義的労働者は、経済の部面ではすべての生産手段を集団に返還させることを目標として努力する……。」「（『全集』第一九卷、二三四～二三五ページ）

## 二、世界論——綱領第三章の新しさ

### ○二〇世紀の世界の巨大な変化

#### 【二—一】綱領第三章第七節

「（七）二〇世紀は、独占資本主義、帝国主義の世界支配をもつて始まった。この世紀のあいだに、人類社会は、二回の世界大戦、ファシズムと軍国主義、一連の侵略戦争など、世界的な惨禍を経験したが、諸国民の努力と苦闘を通じて、それらを乗り越え、人類史の上でも画期をなす巨大な変化が進行した。

多くの民族を抑圧の鎖のもとにおいた植民地体制は完全に崩壊し、民族の自決権は公認の世界的な原理という地位を獲得し、百を超える国ぐにが新たに政治的独立をかちとつて主権国家となった。これらの国ぐにを主要な構成国とする非同盟諸国会議は、国際政治の舞台で、平和と民族自決の世界をめざす重要な力となつてゐる。

国民主権の民主主義の流れは、世界の大多数の国ぐにで政治の原則となり、世界政治の主流となりつつある。

国際連合の設立とともに、戦争の違法化が世界史の発展方向として明確にされ、戦争を未然に防止する平和の国際秩序の建設が世界的な目標として提起された。二〇世紀の諸経験、なかでも侵略戦争やその企てとのたたかひを通じて、平和の国際秩序を現実確立することが、世界諸国民のいよいよ緊急切実な課題となりつつある。」

### ○社会主義をめざす流れはどうなったか

#### 【二—二】綱領第三章第八節

「（八）資本主義が世界を支配する唯一の体制とされた時代は、一九一七年にロシアで起こつた十月社会主義革命を画期として、過去のものとなった。第二次世界大戦後には、アジア、東ヨーロッパ、ラテンアメリカの一連の国ぐにが、資本主義からの離脱の道に踏み出した。

最初に社会主義への道に踏み出したソ連では、レーニンが指導した最初の段階においては、おくれた社会経済状態からの出発という制約にもかかわらず、また、少なくとも試行

錯誤をとめないながら、真剣に社会主義をめざす一連の積極的努力が記録された。しかし、レーニン死後、スターリンをはじめとする歴代指導部は、社会主義の原則を投げ捨て、対外的には、他民族への侵略と抑圧という覇権主義の道、国内的には、国民から自由と民主主義を奪い、勤労人民を抑圧する官僚主義・専制主義の道を進んだ。「社会主義」の看板を掲げておこなわれただけに、これらの誤りが世界の平和と社会進歩の運動に与えた否定的影響は、とりわけ重大であった。

日本共産党は、科学的社会主義を擁護する自主独立の党として、日本の平和と社会進歩の運動にたいするソ連覇権主義の干渉にたいしても、チェコスロバキアやアフガニスタンにたいするソ連の武力侵略にたいしても、断固としてたたかいた。

ソ連とそれに従属してきた東ヨーロッパ諸国で一九八九〇年に起こった支配体制の崩壊は、社会主義の失敗ではなく、社会主義の道から離れ去った覇権主義と官僚主義・専制主義の破産であった。これらの国々には、革命の出発点においては、社会主義をめざすという目標が掲げられたが、指導部が誤った道を進んだ結果、社会の実態としては、社会主義とは無縁な人間抑圧型の社会として、その解体を迎えた。

ソ連覇権主義という歴史的な巨悪の崩壊は、大局的な視野で見れば、世界の革命運動の健全な発展への新しい可能性を開く意義をもった。

今日、重要なことは、資本主義から離脱したいいくつかの国々に、政治上・経済上の未解決の問題を残しながらも、『市場経済を通じて社会主義へ』という取り組みなど、社会主義をめざす新しい探究が開始され、人口が一三億を超える大きな地域での発展として、二一世紀の世界史の重要な流れの一つとなろうとしていることである。」

### ○現代における資本主義の矛盾

#### 【二―3】綱領第三章第九節から

(九) ソ連などの解体は、資本主義の優位性を示すものとはならなかった。巨大に発達した生産力を制御できないという資本主義の矛盾は、現在、広範な人民諸階層の状態の悪化、貧富の格差の拡大、くりかえす不況と大量失業、国境を越えた金融投機の横行、環境条件の地球的規模での破壊、植民地支配の負の遺産の重大さ、アジア・中東・アフリカ・ラテンアメリカの多くの国々にでの貧困の増大(南北問題)など、かつてない大きな規模と鋭さをもって現われている。」

### 三、資本主義の矛盾を生き生きととらえる

#### ○資本主義の推進的動機・規定的目的

##### 【三―1】資本の生活本能

「資本家としては、彼はただ人格化された資本にすぎない。彼の魂は資本の魂である。ところが、資本は唯一の生活本能を、すなわち自己を増殖し、剰余価値を創造し、その不変部分である生産諸手段で、できる限り大きな量の剰余労働を吸収しようとする本能を、

もっている。資本とは、生きた労働を吸収することによってのみ吸血鬼のように活気づき、しかもそれをより多く吸収すればするほどますます活気づく、死んだ労働である。」（『資本論』新書版②三九五ページ、上製版I a三九六ページ）

【三―2】資本主義的生産過程を推進する動機、規定する目的

「第一に、資本主義的生産過程を推進する動機とそれを規定する目的とは、できるだけ大きな資本の自己増殖、すなわち剰余価値のできるだけ大きな生産、したがって資本家による労働力のできるだけ大きな搾取である。」（『資本論』新書版③五七六ページ、上製版I b五七四ページ）

【三―3】交換価値とその増殖が資本の推進的動機である

「資本家は、人格化された資本である限りにおいてのみ、一つの歴史的価値をもち、また…：歴史的存在権をもつ。その限りでのみ、彼自身の過渡的な必然性が、資本主義的生産様式の過渡的必然性のうちに含まれる。しかし、その限りではまた、使用価値と享受ではなく、交換価値とその増殖とが、彼の推進的動機である。価値増殖の狂信者として、彼は容赦なく人類を強制して、生産のために生産させ、それゆえ社会的生産諸力を発展させ、そしてまた各個人の完全で自由な発展を基本原理とする、より高度な社会形態の唯一の現実的土台となりうる物質的生産諸条件を創造させる。…：資本主義的生産の発展は、一つの産業的企業に投下される資本が絶えず増大することを必然化し、そして競争は個々の資本家にたいして、資本主義的生産様式の内在的諸法則を外的な強制法則として押しつける。競争は資本家に強制して、彼の資本を維持するために絶えず資本を拡大させるのであるが、彼は累進的蓄積によってのみそれを拡大することができる。」（同前④一〇一五―一〇一六ページ、上製版I b一〇一二ページ）

○マルクスは資本主義の体制的矛盾をどうとらえたか

【三―4】蓄積のための蓄積、生産のための生産

「蓄積せよ、蓄積せよ！これがモーセであり、預言者たちである！『勤勉が材料を供給し、この材料を節約が蓄積する』。だから節約せよ、節約せよ、すなわち、剰余価値または剰余生産物のうち、できる限り大きな部分を資本に再転化せよ！蓄積のための蓄積、生産のための生産、この定式で古典派経済学はブルジョア時代の歴史的使命を表明した。」（同前④一〇二二ページ、上製版I b一〇一七ページ）

【三―5】社会の絶対的な生産力と最低限に引き下げられた社会大衆の消費との矛盾

「直接の搾取の諸条件とこの搾取の実現の諸条件とは、同じではない。それらは、時間と場所だけでなく、概念的にも異なっている。前者は、社会の生産力によって制限されているだけであり、後者は、いろいろな生産部門のあいだの比例関係と社会の消費力によって制限されている。しかし、ここでいう社会の消費力は、絶対的な生産力によって規定されているものでもなければ、絶対的な消費力によって規定されているものでもなく、敵対的な分配諸関係——それは、社会の大衆の消費を、多かれ少なかれせい限界内でしか



変化できない最低限に引き下げる——を基盤とする消費力によって規定されている。社会の消費力は、さらに、蓄積への衝動によって、すなわち、いっそう拡大する規模で資本を大きくし剰余価値を生産しようという衝動によって、制限されている。」(同前⑨四一六ページ、上製版Ⅲ a 四一一ページ)

【三―6】生産力の発展と消費の狭い基盤との衝突

「これは、資本主義的生産にとつての法則——生産方法そのものにおけるたえざる革命、それによってひきおこされる現存資本の不断の減価、全般的な競争戦、生産の改良と生産規模拡大の必要などによって課せられている法則である。生産の改良と生産規模の拡大は、資本がただ自己を維持し、没落の罰を受けないためだけに要求される。したがって、市場はつねに拡張されなければならない、その結果、市場を規制する諸関連および諸条件は、ますます、生産者たちから独立してはたらく一つの自然法則という姿をとるようになり、ますます制御不能なものとなってくる。内的な矛盾は、生産の外的な分野の拡張によって、その解決をはかろうとする。しかし、生産力が発展すればするほど、それは、消費の諸条件が立脚している狭い基盤とますます衝突するようになる。この矛盾に満ちた基盤の上では、資本の過剰が相対的人口過剰の増大と結びついているのは、決して矛盾ではない。というのは、両者が合体されれば、生産される剰余価値の総量は増大するではあるが、まさにそれとともに、この剰余価値が生産される諸条件と、この剰余価値が実現される諸条件とのあいだの矛盾は拡大するからである。」(同前⑨四一六―四一七ページ、上製版Ⅲ a 四一一―四一二ページ)

【三―7】資本主義的生産の真の制限は資本そのものである

「資本主義的生産の真の制限は、資本そのものである。というのは、資本とその自己増殖とが、生産の出発点および終結点として、生産の動機および目的として、現われる、ということである。生産は資本のためのものであって、その逆ではないということ、生産諸手段はたんに生産者たちの社会の生活条件をたえず拡大するための手段ではない、ということである。生産者大衆の収奪と貧困化にもとづく資本価値の維持と増殖が、その内部でのみ運動することができる諸制限——このような諸制限は、資本が自分の目的を達成するために使用せざるをえない生産諸方法と、たえず衝突することになる。この生産諸方法とは、生産の無制限的な拡張に向かって、自己目的としての生産に向かって、労働の社会的生産諸力の無条件的な発展に向かつて、突進するものである。手段——社会的労働の生産諸力の無条件的な発展——は、現存資本の増殖という限られた目的とは、たえず衝突することになる。それゆえ、資本主義的生産様式が、物質的生産力を発展させ、かつこの生産力に照応する世界市場をつくり出すための歴史的な手段であるとすれば、この資本主義的生産様式は同時に、この生産様式のこのような歴史的任務と、これに照応する社会的生産諸関係とのあいだの恒常的矛盾なのである。」(同前⑨四二六―四二七ページ、上製版Ⅲ a 四二三ページ)

【三―8】恐慌の究極の根拠

「すべての現実の恐慌の究極の根拠は、依然としてつねに、一方では大衆の貧困、他方

では生産諸力を、あたかも社会の絶対的消費能力がその限界をなしているかのよう<sup>⑩</sup>に発展させようとする、資本主義的生産様式の衝動なのである。」（同前⑩八三五ページ、上製版Ⅲb八三九ページ。ただし、草稿でのマルクスの文章による。現行版では、エンゲルスが若干書き換えている）

## ○エンゲルスの定式について

【三—9】エンゲルス『空想から科学へ』（一八八〇年）

「中世に発達したような商品生産においては、労働の生産物がだれのものであるかという問題は、まったくおこりえなかった。個人の生産者は、通例は、自分のものである原料、しばしば自分でつくった原料で、自分の労働手段と自分の手労働または家族の手労働で生産物をつくったのである。彼によってあらためて生産物が取得される必要は少しもなく、それはまったくひとりでに彼のものであった。したがって、生産物に対する所有は自分の労働にもとづいていた。……そこへ、大きな作業場や工場における生産手段の集積がおこり、実際に社会的な生産手段への生産手段の転化がおこったのである。しかし、社会的な生産手段と生産物は、これまでどおり個人の生産手段と生産物であるかのように扱われた。これまで労働手段の所有者が生産物を取得したのは、生産物は通常は彼自身の生産物であって、他人の補助労働は例外だったからであるが、いまでも労働手段の所有者は、生産物がおもはや彼の生産物でなくて、もっぱら他人の労働の生産物であるにもかかわらず、ひきつづきその生産物を取得したのである。したがって、いまでは社会的生産されている生産物が、生産手段を実際に動かし、生産物を現実に生産した人々によって取得されないで、資本家によって取得されたのである。生産手段と生産は本質的に社会的になっている。しかしこのような生産手段と生産は、各人が自分の生産物を所有し、それを市場にもちだすというような、個人<sup>⑪</sup>の私的生産を前提とする取得形態のもとにおかれる。生産様式はその前提を廃棄しているにもかかわらず、それはこのような取得形態のもとにおかれる。この矛盾が新しい生産様式に資本主義的性格をあたえるのであるが、この矛盾のなかに、現代のすべての衝突がすでに萌芽としてふくまれているのである。新しい生産様式がすべての決定的な生産分野とすべての経済的に決定的な国々でますます支配的になり、それによって個人生産が駆逐されるかとするにたらない残存物になるにつれて、社会的生産と資本主義的取得とが両立でないこともいつそはつきりと明るみに出てこないわけにはいかなかった。」（エンゲルス『空想から科学へ』古典選書版、六七〜六八ページ）

「資本主義的革命——まず単純協業とマニユファクチュア〔工場制手工業〕とによる工業の改造。これまで分散していた生産手段の大きな作業場における集積、それによる個人<sup>⑫</sup>の生産手段から社会的生産手段への転化——この転化は、全体としての交換の形態には影響しない。古い取得形態がひきつづき効力をもっている。資本家があらわれる。生産手段の所有者としての資格で、彼は生産物をも取得して、それを商品にする。生産は社会的行為になる。交換とともに取得はひきつづき個人的行為、すなわち個人<sup>⑬</sup>の行為である。社会的生産物は個々の資本家によって取得される。これが根本矛盾であり、そこから、今日の社会がその中で動いているすべての矛盾、そして大工業が明るみに出すすべての矛盾が

発生するのである。」（同前、九三ページ）

### ○商品の“命がけの飛躍”

【三一10】商品の販売に失敗すれば商品所有者は打撃を受ける

「W〔商品〕—G〔貨幣〕。商品の第一の変態または販売。商品価値が商品の体から金の体に飛び移ることは、私が別のところ「『経済学批判』第二章、『全集』第一三卷七—ページ」で名づけたように、商品の“命がけの飛躍”である。この飛躍に失敗すれば、なるほど商品は打撃を受けないかもしれないが、商品所有者は確かに打撃を受ける」（『資本論』新日本新書①一八〇—一八一ページ、上製版I a 一七九ページ）

### ○「恐慌の可能性」について

【三一11】社会的分業と「恐慌の可能性」

「分業は、労働生産物を商品に転化させ、そうすることによって、労働生産物の貨幣への転化を必然にする。同時に、分業は、この化体が成功するかどうかを偶然にする。」（同前①一八四ページ、上製版I a 一八三ページ）

【三一12】商品交換は物々交換の個人的場所的制限を打ち破る

「商品流通においては、一面では、商品交換が直接的な生産物交換の個人的場所的制限を打ち破り、人間的労働の素材変換を發展させる。他面では、当事者たちによっては制御不可能な、社会的な、自然的諸連関の全範囲が發展する。」（同前①一九一ページ、上製版I a 一九〇ページ）

【三一13】商品流通に内在する矛盾が含んでいるのは「恐慌の可能性」だけである

「商品に内在的な対立、すなわち使用価値と価値の対立、私的労働が同時に直接に社会的労働として現われなければならないという対立、特殊的具体的労働が同時にただ抽象的一般的労働としてのみ通用するという対立、物の人格化と人格の物化との対立——この内在的矛盾は、商品変態上の諸対立においてその發展した運動諸形態を受け取る。だから、これらの形態は、恐慌の可能性を、とはいえただ可能性のみを、含んでいる。この可能性の現実性への發展は、単純な商品流通の立場からはまだまったく存在しない諸関係の全範囲を必要とする。」（同前①一九三ページ、上製版I a 一九二ページ）

（シ）（不破哲三「二一世紀・『資本論』のすすめ」『前衛』二〇〇五年二月号、五一ページ）

	第一部	第二部	第三部
1863	草稿執筆開始（8月）		
1864	草稿執筆完了（夏）		草稿前半執筆（夏以後）
1865		前半第一草稿 第三草稿（～67年）	後半執筆（夏～年末）
1866	仕上げ稿の作業		
1867	第一部刊行（9月）	第四草稿（～69年）	
1868		第二草稿（～70年）	
1872	第二版（7月。分冊～73年） フランス語版（9月、分冊～75年）		
1877		第五草稿 第六草稿（～78年）	
1878		第七草稿	
1880		第八草稿（～81年）	
1881	第三版準備開始（11月）		
—————マルクス死去—————			
1883	第三版刊行（エンゲルス）		
1885		第二部刊行（エンゲルス）	
1887	英語版刊行（1月。エンゲルス）		
1890	第四版刊行（12月。エンゲルス）		
1894			第三部刊行（12月。エンゲルス）

【三―13】『資本論』各部の執筆と刊行の経過

【三一14】 第二部の草稿の執筆時期と内容

	ページ数	執筆時期	草稿の内容
第一草稿	一五一	六五年前半	第一篇、第二篇、第三篇
第三草稿	七三	六五～六七	第一篇
第四草稿	六一	六七～六九	第一篇、第二篇の最初の数章
第二草稿	二二一	六八～七〇	第一篇、第二篇、第三篇
〔以下・新稿〕			
第五草稿	五五	七七年四月～一〇月	第一篇のはじめの四章
第六草稿	一七	七七年一〇月～七八年二月	第一篇・第一章の大部分
第七草稿	七	七八年七月以後	第一篇・第一章
第八草稿	七〇	八〇～八一年	第三篇

※不破哲三『「資本論」全三部を読む』第四冊（新日本出版社、二〇〇三年）、三四～一  
 ジ参照。草稿では、現行版第二部の「篇」は「章」になっている。

【三一15】 『資本論』第二部第三篇のプランと現行版の構成

第一草稿執筆終了時点のプラン	現行版の構成
<p>第三章 流通と再生産</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 流通（再生産）の実体的諸条件</li> <li>2 再生産の弾力性</li> <li>3 蓄積、あるいは拡大された規模での再生産</li> <li>4 再生産過程の、並行、上向的進行での連続、循環</li> <li>5 必要労働と剰余労働</li> <li>6 再生産過程の攪乱</li> <li>7 第三部への移行</li> </ol>	<p>第三篇 社会的総資本の再生産と流通</p> <p>第一八章 緒論</p> <p>第一九章 対象についての従来の諸叙述</p> <p>第二〇章 単純再生産</p> <p>第二一章 蓄積と拡大再生産</p>

※第一草稿執筆終了時のプランについては、『資本の流通過程』（大月書店、一九八二年）二九四ページ、参照。不破哲三『「資本論」全三部を読む』第四冊、五一～五二ページ参照。

## 四、未来社会論

### ○かなめは生産手段の社会化

#### 【四―1】綱領第四章第一五節

(一五) 日本の社会発展の次の段階では、資本主義を乗り越え、社会主義・共産主義の社会への前進をはかる社会主義的変革が、課題となる。これまでの世界では、資本主義時代の高度な経済的・社会的な達成を踏まえて、社会主義的変革に本格的に取り組んだ経験はなかった。発達した資本主義の国での社会主義・共産主義への前進をめざす取り組みは、二一世紀の新しい世界史的な課題である。

社会主義的変革の中心は、主要な生産手段の所有・管理・運営を社会の手に移す生産手段の社会化である。社会化の対象となるのは生産手段だけで、生活手段については、この社会の発展のあらゆる段階を通じて、私有財産が保障される。

生産手段の社会化は、人間による人間の搾取を廃止し、すべての人間の生活を向上させ、社会から貧困をなくすとともに、労働時間の抜本的な短縮を可能にし、社会のすべての構成員の人間の発達を保障する土台をつくりだす。

生産手段の社会化は、生産と経済の推進力を資本の利潤追求から社会および社会の構成員の物質的精神的な生活の発展に移し、経済の計画的な運営によって、くりかえしの不況を取り除き、環境破壊や社会的格差の拡大などへの有効な規制を可能にする。

生産手段の社会化は、経済を利潤第一主義の狭い枠組みから解放することによって、人間社会を支える物質的生産力の新たな飛躍的な発展の条件をつくりだす。―

#### 【四―2】第二〇回党大会綱領改定報告から(一九九四年)

「社会主義とは『生産手段の社会化』だとよくいわれます。わが党の綱領にもそのことは明記されています。では『社会化』とはなにかと言えば、生産手段を社会、すなわち人民の手に移すことであります。生産手段を国有化しさえすれば、それが『社会化』だというわけにはゆかないのです。国有化が生産手段を人民の手に移す形態、手段となるか、少なくともそれに接近する一形態となるかどうか、ここに肝心な問題があります。……

ところがスターリンは、三〇年代に、工業でも農業でも、レーニンのこの方針を完全に投げすてました。スターリンの指導と命令のもとに強行された農業の『集団化』なるものは、農民の自発的な意思による協同組合化という科学的社会主義の大原則をふみにじって、農民を強制的にコルホーズなどに追いこんだものであり、農民は、国内の移動や旅行の自由さえもたない、極端に隷属的な生活条件のもとにおかれました。しかもそれは、シベリアその他への数百万の農民の追放をともなっていたのです。工業でも、革命の初期に重視された経済管理への労働者、労働組合の参加の制度は失われ、労働者は賃金など自分の労働条件の問題についての交渉の権利さえ大幅に制限されたり奪われたりしたうえ、人権を侵害する過酷な労働制度が強権をもって導入されるようになりました。

たしかに形のうえでは、『国有化』もあれば『集団化』もありましたが、それは、生産手段を人民の手に移すことも、それに接近することも意味しないで、反対に、人民を経済

の管理からしめだし、スターリンなどの指導部が経済の面でも全権限をにぎる専制主義、官僚主義の体制の経済的な土台となったのです。」（『前衛』第二〇回党大会特集号、一三〇―一四一ページ）

### ○共産主義の運動の目標の定式化で発展があった

【四―3】「共産主義的信条表明草案」（一八四七年六月）

※共産主義者同盟に改称した第一回大会で採択され、それを各地の組織で討議することになった文書。

「第二問。共産主義者の目的はなにか？」

答—— 社会の各構成員が、その素質および力の総体を完全に自由に、そしてそのことによってこの社会の根本的諸条件をそこなうことなしに、発展させ、かつ実証することができるように、社会を編成すること。

第三問 君たちは、どのようにしてこの目的を達するつもりであるか？

答—— 私的所有——財貨共有制がこれに代わる——の廃止によって」（古典選書『共産党宣言／共産主義の諸原理』新日本出版社、一四九ページ）

【四―4】エンゲルス『共産主義の諸原理』（一八四七年）

※「草案」の討議の過程でエンゲルスが執筆したもの。一八四七年十一月、パリの組織での綱領討論のさいにエンゲルスが提案し、採択された。

「私的所有は同様に廃止されなければならないであろうし、またその代わりに、すべての生産用具の共同の利用および共同の合意による全生産物の分配、すなわちいわゆる財貨共有制が現われるであろう」（同前、一二七ページ）

【四―5】マルクス、エンゲルス『共産党宣言』（一八四八年）

「共産主義の特徴は、所有一般の廃止ではなくて、ブルジョア的所有の廃止である。

しかし、近代的なブルジョアの私的所有は、階級対立に、他人による人の搾取にもとづいた、生産物の生産および取得の、最後の、もっとも完成した表現である。

この意味で、共産主義者は、自分の理論を一つの表現で総括することができる——私的所有の廃止。」（同前、七三ページ）

「プロレタリアートは、ブルジョアジーからすべての資本をつぎつぎに奪い取り、すべての生産用具を国家の手に、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアートの手に集中し、大量の生産諸力をできるだけ急速に増大させるために、自分の政治的支配を利用するのである。」（同前、八四ページ）

【四―6】マルクス『資本論』第一部

「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式は、それゆえ資本主義的な私的所有は、自分の労働にもとづく個人的な私的所有の最初の否定である。しかし、資本主義的生産は、自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生み出す。これは否定の否定である。この否定「資本主義的私的所有の否定」は、私的所有を再建するわけではないが、し

かし、資本主義時代の成果——すなわち、協業と、土地の共有ならびにその労働そのものによって生産された生産手段の共有——を基礎とする個人的所有を再建する」（『資本論』新書版④一三〇六ページ、上製版I b一三〇一ページ）

#### ○「結合した生産者たち」について

【四—7】自由な人々の連合体（『資本論』第一部第一章）

「最後に目先を変えるために、共同的生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体〔アソツイアツイオン〕を考えてみよう。」（同前①一三三ページ、上製版I a一三三ページ）

【四—8】「結合した生産者」「結合的生産様式」（『資本論』第三部第二章「資本主義的生産における信用の役割」）

「資本主義的生産の最高の発展〔株式会社形成——引用者〕のこの結果こそ、資本が生産者たちの所有に、ただし、もはや個々ばらばらな生産者たちの私的所有としての所有ではなく、結合した〔アソツイールター〕生産者である彼らの所有としての、直接的な社会的所有としての所有に、再転化するための必然的な通過点である。他方では、それは、これまではまだ資本所有と結びついていた再生産過程上のすべての機能が、結合した生産者たちの単なる諸機能に、社会的諸機能に、転化するための通過点である。」（同前⑩七五七〜七五八ページ、上製版III a七五七〜七五八ページ）

「信用制度は、資本主義的私的企業が資本主義的株式会社に漸次的に転化するための主要な基盤をなすのと同じように、多かれ少なかれ国民的な規模での協同組合企業の漸次的拡大の手段を提供する。資本主義的株式企業は、協同組合工場と同様に、資本主義的生産様式から結合的〔アソツイールテ〕生産様式への過渡形態とみなされるべきであるが、ただ対立が、前者では消極的に止揚され、後者では積極的に止揚されるのである。」（同前⑩七六四ページ、上製版III a七六四ページ）

【四—9】「結合した労働の生産様式」（『資本論』第三部第三章「資本主義以前（の状態）」）

「最後に、資本主義的生産様式から結合した〔アソツイールテ〕労働の生産様式への移行の時期に、信用制度が有力な槓杆として役立つであろうことは、なんの疑いもない。」（同前⑩一〇六四ページ、上製版III b一〇六九ページ）

【四—10】資本主義のもとで「結合された労働者たち」

「生産物は、一般に、個人的生産者の直接的生産物から一つの社会的生産物に、一つの全体労働者、すなわち一つの結合された〔コンビニールテ〕労働人員——その制委員は労働対象の処理に直接または間接にかかわっている——の共同生産物に、転化する。そのため労働過程そのものの協業的性格とともに、生産的労働の概念や、その担い手である生産的労働者の概念も、必然的に拡大される。」（同前③八七二ページ、上製版I b八六八ページ）



## ○「市場経済を通じて社会主義へ」の探究

【四—11】不破哲三「レーニンと市場経済——中国社会科学院での学術講演」（二〇〇二年八月）

「この道を社会主義への道とするには、何が必要か

そういう意義を持つ問題であるだけに、この道の前途には、理論的にも、研究すべきいろいろな問題があると思います。

とくに二つの点についてのべたいと思います。

一つは、市場経済の道が社会主義に到達する道として成功するためには、何が必要か、という問題です。……

レーニンが第一に強調したのは、社会主義部門が、市場での競争を通じて、市場での競争で資本主義に負けない力をもつようになること、その立場で、内外の資本主義から学べるものは学び尽くすということでした。……

レーニンが言う『資本主義に負けない』ということは、生産性の問題とか、経済の効率とか狭い意味での経済的利益でないことに、私は注意する必要があると思います。

レーニンは、たとば労働者の職場での安全の問題について、資本主義のもっとも優れたものを確保せよという論文を書いたことがあります。つまり、『資本主義に負けない』ということには、いまでいえば環境の問題、公害の問題など、そういうことも含まれているというkとおです。そういう面でも、社会主義ならではの優位性を発揮しようじゃないか、という提起でした。

第二は、経済全体の要をなす……『瞰制高地』の問題です。これを社会主義の部門としてしっかり握って、経済発展を方向づける力が発揮されるようにすることです。レーニンが、『瞰制高地』の具体的な内容としていったのは、当時のロシアの現実では、『工業と輸送の分野の生産手段の圧倒的部分』（レーニン）を社会主義国家が握っているということでした。しかし、これは当時のロシアの条件の下でのレーニンの考えで、何が『瞰制高地』の役割をはたすかということは、その時代、その国の条件によって探究されるべき問題だと思えます。

第三は、市場経済が生み出す否定的な諸現象から社会と経済を防衛するということです。

市場経済は、もともと無政府性や弱肉強食的な競争性をもっています。そこから雇用不安、失業、社会的な経済格差などの問題が生み出されます。そういう矛盾を抑えていく力は、市場経済自体は持っていません。これを抑え制限するためには、社会保障制度をはじめとする、いろいろな社会的な規制が必要です。……

また市場経済の否定面としては、金がすべてという拝金主義や各種の腐敗現象を必ず生み出すことをあげなければなりません。こういう腐敗の傾向が、社会主義の精神をもっとも強くもっていないなければならないはずの公的な機関を汚染すれば、それは、官僚主義、専制主義をひどくする働きをします。……

以上のことに若干の今日的な問題を付け加えますと、いま、世界の資本主義体制自体にとっても、市場経済万能主義か、それとも社会的規制、民主的規制を確立した市場経済か

という問題が、大きな争点になっています。ごく大ざっぱに言えば、前者の傾向はアメリカに、ブッシュ政権下のアメリカに非常に強烈に現れており、後者の傾向は現在のヨーロッパ諸国にかなり強く現れています。このことは、環境問題、社会的格差の問題、各国経済の自主性の問題など、世界的な経済問題とも結びついています。……

将来、市場経済の前途はどうなるか？

研究すべきもう一つの問題は、より理論的、より将来的な問題ですが、『計画経済と市場経済の結合』という道を成功のうちに進んで、社会主義の目標に到達した場合、市場経済はどうなるのか、消滅してしまうのかそれとも残るのか。もし残るとすれば、いつまでの範囲で残るのか、という問題です。

私はさきほど、市場経済の否定面についてのべましたが、いまのべた立場で市場経済を研究してみると、それが、他の方式や仕組みでは間に合わせられない重要な経済的効用を持つていることがわかります。

たとえば、需要と供給の調節という作用です。

ある国の国民が、一年間にどれだけの量の靴を必要とするか。こういうことは、市場の作用がなくても、計算できます。しかし、どういうタイプの、どういう色合いの靴が何足あれば、国民の好みを満たせるかという問題は、それはコンピュータがどんなに発達しようが、計算では絶対に答はできません。こういう分野では、市場経済の調節作用が、長期にわたって必要になるでしょう。

それから、労働の生産性、あるいは企業活動の成績、そういうものはかたり、比較したりする問題でも、市場の判断は、なかなか貴重であります。

マルクス自身、『資本論』のなかで、熟練した労働と単純な労働とを比較して、熟練労働がどれだけ多くの価値を生み出すかを問題にしたときに、それをはかるのは市場だとおぼえました。……

……『資本論』には、マルクスの言葉で『共産主義社会でも価値規定は残る』という言葉があります。ここから、市場経済の存続まで、マルクスが考えていたとおしはかるのは無理です。しかし、『価値規定』が残るとしたら、市場経済をぬきにしてどういう残り方ができるだろうかを考えなければなりません。

価値規定が残るといえるためには、生産者の背後で働いていた『社会的過程』、すなわち、市場経済にかわって、労働の『価値』をはかるなんらかの仕組みがどうしても必要になってきます。

そこには、まだ理論的に解決されていない大きな研究問題があると思います。」

(不破哲三『「資本論」全三部を読む』新日本出版社、第一冊、二六五〜二七一ページ)

○「自由」の発展という角度からの解明

【四―12】マルクス、エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』（一八四六年）

「労働が分割されはじめるやいなや、各人は活動の特定の排他的な領域をもち、その領域が彼におしつけられ、そこから彼は抜け出すことができない。彼は狩人、漁師、あるいは

は牧人、あるいは批判的批判家であり、そして、彼が生活の手だてを失いたくなければ、そうでありつづけなければならない。——他方、各人が活動の排他的な領域をもつのではなく、むしろそれぞれの任意の部門で自分を発達させることができる共産主義社会においては、社会が全般的に生産を規制し、そして、まさにそのことによって私は、今日はこれをし、明日はあれをすることができるようになり、狩人、漁師、牧人、あるいは批判家になることなしに、私がまさに好きなように、朝には狩をし、午後には釣りをし、夕方には牧畜を営み、そして食後には批判をするということができるようになる。」(古典選書版『新訳』ドイツ・イデオロギー』新日本出版社、四四ページ)

【四—13】マルクス、エンゲルス『共産党宣言』(一八四八年)

「階級および階級対立をもつ古いブルジョア的社会の代わりに、各人の自由な発展が、万人の自由な発展の条件である連合体「アソツィアツィオン」が現われる。」(古典選書版『共産党宣言／共産主義の諸原理』八六ページ)

【四—14】マルクス『一八五七—五八年草稿』「自由な個性の発展」

「(1) 人格的な依存諸関係(最初はまったく自然的)は最初の社会諸形態であり、この諸形態においては人間的生産性は狭小な範囲においてしか、また孤立した地点においてしか展開されないのである。」

(2) 物象的依存性のうえにきずかれた人格的独立性は第二の大きな形態であり、この形態において初めて、一般的社会的物質代謝、普遍的諸関連、全面的諸欲求、普遍的諸力能といったものの一つの体系が形成されるのである。

(3) 諸個人の普遍的な発展のうえにきずかれた、また諸個人の共同体的、社会的生産性を諸個人の社会的力能として服属させることのうえにきずかれた自由な個性は、第三の段階である。第二段階は第三段階の諸条件をつくりだす。」(マルクス『資本論草稿集』大月書店①、一三八ページ。(1) (3)の区分および段落改行は引用者)

【四—15】マルクス『資本論』第三部第四章「三位一体的定式」

「(1) 自由の国は、事実、窮迫と外的な目的への適合性とによって規定される労働が存在しなくなるところで、はじめて始まる。したがってそれは、当然に、本来の物質的生産の領域の彼岸にある。」

(2) 未開人が、自分の諸欲求を満たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならないように、文明人もそうしなければならない。しかも、すべての社会諸形態において、ありうべきすべての生産諸様式のもとで、彼は、そうした格闘をしなければならぬ。彼の発達とともに、諸欲求が拡大するため、自然的必然性のこの国が拡大する。しかし同時に、この諸欲求を満たす生産諸力も拡大する。

(3) この領域における自由は、ただ、社会化された人間、結合した「アソツィイールテン」生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝によって——盲目的な支配力としてのそれによって——支配されるのではなく、この自然との物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおくこと、すなわち、最小の力の支出で、みずからの人間性にもっともふさわしい、もっとも適合した諸条件のもとでこの物質代謝を行なうこと、この点

にだけありうる。しかしそれでも、これはまだ依然として必然性の国である。

(4) この国の彼岸において、それ自体が目的であるとされる人間の力の発達が、真の自由の国が——といっても、それはただ、自己の基礎としての右の必然性の国の上へのみ開花しうるのであるが——始まる。労働日の短縮が根本条件である。」（『資本論』新書版

⑬一四三四〜一四三五ページ、上製版Ⅲb一四四〇〜一四四二ページ。(1)〜(4)の区分および段落改行は引用者による)

## マルクス、エンゲルス関連年表

- 1770                                   ヘーゲル生まれる
- 1776                                   アメリカ「独立宣言」
- 1872                                   ワット（英）、複動式蒸気機関の特許（産業革命）
- 1789                                   フランス革命「人権宣言」
- 1818    マルクス、生まれる
- 1820    エンゲルス、生まれる
- 1831                                   仏・リヨンで最初の労働者蜂起
- 1838～42                              英・チャーティスト運動
- 1842    マルクス、『ライン新聞』への寄稿を開始、のちに主筆になる（～43・3）
- 1844    マルクスとエンゲルス、理論上の一致を確認
- 1846    マルクス、エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』を執筆（生前は刊行されず）
- 1847    共産主義者同盟第1回大会、第2回大会
- 1848    『共産党宣言』
- 1848～49                              ヨーロッパ革命
- マルクス、エンゲルスはドイツに帰国し、「新ライン新聞」を発行
- 1849    革命の敗北後、マルクス、エンゲルスはイギリスに亡命
- 1850    マルクス、経済学の研究を再開。エンゲルスはマンチェスターの商会へ
- 1859    マルクス『経済学批判』第1分冊
- 1861                                   アメリカ南北戦争（～65）
- 1864                                   国際労働者協会（第一インタナショナル）創立
- 1867    マルクス『資本論』第1部初版
- 1868                                   日本・明治維新
- 1871                                   パリ・コムューン。最初の労働者革命
- 1872    『資本論』第1部第2版、同フランス語版（～75）
- 1875    マルクス「ゴータ綱領批判」
- 1875                                   ドイツ社会主義労働党結成
- 1877    エンゲルス『反デューリング論』（刊行は78）
- 1880    エンゲルス『空想から科学へ』
- 1883    マルクス、死去
- 1884    エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』
- 1885    エンゲルス編集で『資本論』第2部刊行
- 1886    エンゲルス「フォイエルバッハ論」（刊行は88）
- 1889                                   第二インタナショナル創立
- 1894    エンゲルス編集で『資本論』第3部刊行
- 1895    エンゲルス、死去